文芸

小説・戯曲・随筆・評論

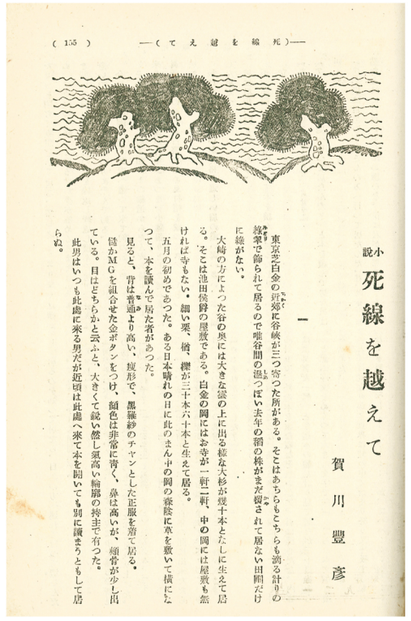
〈小説〉
芥川龍之介『秋山図』（大10・1）『点鬼簿』（大15・10）『河童』（昭2・3）『西方の人』（昭2・8）
宇野浩二『耕右衛門の改名』（大8・10）『枯木のある風景』（昭8・1）
賀川豊彦『死線を越えて』（大9・1～5）
葛西善蔵『不能者』（大8・8）『湖畔手記』（大13・11）
川端康成『禽獣』（昭8・7）
黒島伝治『渦巻ける烏の群』（昭3・2）
小林多喜二『東倶知安行』（昭5・12）『地区の人々 ―火を継ぐもの―』（昭8・3）
佐藤春夫『美しい町』（大8・8～12）
里見弴『潮風』（大9・10～大10・4）
志賀直哉『暗夜行路』（大10・1～昭12・4）『山科の記憶』（大15・1）
島崎藤村『嵐』（大15・9）
瀧井孝作『無限抱擁』（大12・6）
谷崎潤一郎『饒舌録』（昭2・2～12）『卍（まんじ）』（昭3・3～昭5・4）
坪田譲治『お化けの世界』（昭10・3）
中条百合子『心の河』（大13・6）
永井荷風『花火』（大8・12）
長与善郎『青銅の基督 「一名南蛮鋳物師の死」』（大12・1）
丹羽文雄『象形文字』（昭9・4）
野上弥生子『真知子』（昭3・8）
葉山嘉樹『けだものの尻尾』（昭5・12）
林芙美子『風琴と魚の町』（昭6・4）
火野葦平『徐州会戦従軍日記 麦と兵隊』（昭13・8）
堀辰雄『聖家族』（昭5・11）
牧野信一『ゼーロン』（昭6・10）
正宗白鳥『我善坊にて』（大8・4）
宮地嘉六『ある職工の手記』（大8・9）
武者小路実篤『或る男』（大10・7～大12・11）
横光利一『機械』（昭5・9）『紋章』（昭9・1～9）　ほか

〈戯曲〉
谷崎潤一郎『愛すればこそ』（大10・12）
藤森成吉『何が彼女をそうさせたか』（昭2・1）
武者小路実篤『愛慾』（大15・1）　ほか

〈随筆〉
大杉栄『自叙伝』（大10・10～大12・1）
片山潜『自伝』（大10・6～大11・2）
河内銀二郎『特種部落情話 涙の物語』（大8・7）
滋野行人『山村哀話 何処へ』（大8・10）
浜本野花『紡績探訪 職工志願の記 ―女工哀話「地獄の小唄」―』（大8・11）　ほか

〈評論〉
芥川龍之介『文芸的な、余りに文芸的な』（昭和2・4～8）
小林秀雄『様々なる意匠』（昭4・9）『歴史と文学』（昭16・4）
佐藤春夫『潤一郎。人及び芸術』（昭2・3）
宮本顕治『「敗北」の文学 ―芥川龍之介氏の文学について―』（昭4・8）
柳宗悦『朝鮮の友に贈る書』（大9・6）
『失はれんとする一朝鮮建築の為に』（大11・9）　ほか

〈詩歌〉
飯田蛇笏・荻原井泉水・尾上柴舟・金子薫園・河東碧梧桐・北原白秋・草野心平・窪田空穂・西条八十・斎藤茂吉・サトウハチロー・高橋新吉・高浜虚子・高村光太郎・土屋文明・中原中也・中村草田男・中村汀女・野口米次郎・萩原朔太郎・松根東洋城・水原秋桜子・山口誓子・若山牧水・渡辺水巴　ほか


（155）　―死線を越えて―

小説
死線を越えて
賀川豐彦

一

東京芝白金の貧郊に谷峡が三つ寄つた所がある。そこはあちらもこちらも流る計りの緑葉で飾られて居るので唯谷間の湿つぽい去年の銀の株がまだ腐されて居ない田圃だけに緑がない。

大崎の方によつた谷の奥には大きな溜の上に出る様な大杉が現す木とたしに生えて居る。そこは池田侯爵の屋敷である。白金の岡には お寺が一軒、中の岡には屋敷も無ければ寺もない。細い栗、椿、櫻が三十本六十本と生えて居る。

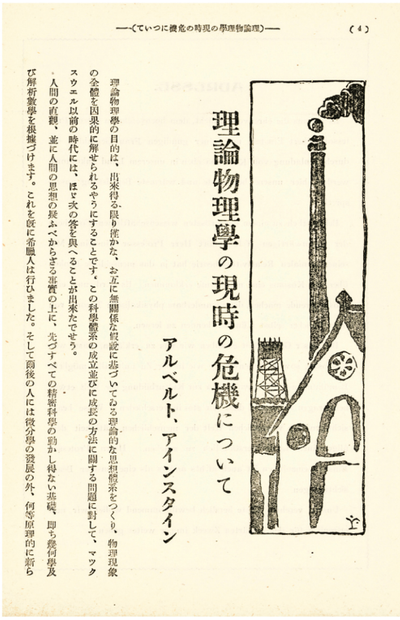
五月の初めでもつた。ある日木晴れの日に此のさん小の岡の森陰に卒を敷いて横になつて、本を読んで居た者があつた。

見ると、背は普通より高い、痩形で、黒縞紗のチャンとした正服を着て居る。

色が白く、目はどちらかと云ふと、大きくて淋しい感じ、風変い鞄の持主で有つた。

此男はいつも此處へ来る男が近頃は此處へ来て本を開いても別に読まうともして居ら ぬ。

『死線を越えて』賀川豊彦 著（大9・1）


―（ていつ）機危の時現の學理物理論―　（4）

理論物理學の現時の危機について

アルベルト、アインスタイン

理論物理學の目的は、出來得る限り深く、お互に無關係な假説に基づいてゐる理論的な思想系をつくり、物理現象の全體を因果的に解せられるやうにすることです。この科學體系の成立並びに成長の方法に關する問題に對して、マックスウェル以前の時代には、ほゞ次の答を與へることが出來たでせう。

人間の直觀、並に人間の思想の疑ふべからざる基礎の上に、先づすべての精密科學の對象、即ち幾何學及び解析學を根據づけます。これを既に希臘人は行ひました。そして爾後の人には微分學の發展の外、何等原理的に新ら

『理論物理学の現時の危機について』アルベルト・アインシュタイン 著（大11・12）

論文

社会・政治・経済・思想・評論・自然科学・時事

〈社会〉
安部磯雄『労働者改造の急務』（大8・4）
荒畑勝三（寒村）『階級闘争批判 階級闘争と労働組合の形式変化』（大8・12）
大庭柯公『新聞記者組合の精神と実行』（大8・4）
厨川白村『苦悶の象徴』（大10・1）
杉森孝次郎『白、黄、黒人の本質的社会合作』（大10・11）
山川菊栄『第四階級の婦人運動』（大8・6）
与謝野晶子『女子改造の基礎的考察』（大8・4）
米田庄太郎『現代社会の階級分析』（大10・1～2）　ほか

〈政治〉
向坂逸郎『政治と文化の相剋』（昭12・4）
鈴木茂三郎『軍部イデオロギーの発展』（昭10・9）
高田保馬『国家の永続性』（大14・9）
山川均『デモクラシーの経済的基礎』（大8・5）　ほか

〈経済〉
河津暹『経済生活改造の第一歩』（大8・4）
高橋誠一郎『加特力教経済学』（大13・9）
福田徳三『資本増殖の理法と資本主義の崩壊』（大10・10～11）　ほか

〈思想〉
阿部次郎『理想主義のために』（大10・12）
内田魯庵『宗教革命問題 釈迦と基督とマルクス』（大9・8）
桑木厳翼『カントの政治哲学に就て』（大11・3）
小泉信三『リヒヤルト・ワグナアと社会主義』（大13・3）
鶴見祐輔『新自由主義の立場より』（昭3・5）
バートランド・ラッセル『愛国心の功過』（大10・1）
長谷川如是閑『国家主義に内在する軍国的要素』（大10・4）
福田徳三『レニンの国家理論』（大11・1～4）
森戸辰男『二種の人権宣言』（大9・10）
矢崎美盛『現代哲学思潮』（大11・9）　ほか

〈評論〉
青野季吉『東京帝国大学論』（昭4・10）
毛沢東『持久戦を論ず』（昭13・10）　ほか

〈自然科学〉
石原純『アインスタインの宇宙論と思惟の究極』（大10・11）
小倉金之助『科学大衆化の意義』（昭15・1）
駒井卓『蜜蜂の踊』（昭7・9）
吉村冬彦『相対原理側面観』（大11・12）　ほか

〈時事〉
内田魯庵『大杉栄追想 第三者から見た大杉』（大12・11）
楠山義太郎『三国同盟と英米合作』（昭15・11）
倉田百三『震災に就いての感想』（大12・10）
佐々弘雄『満洲事変 強行軍部と幣原外交』（昭6・11）
末弘厳太郎『司法の権威とデモクラシー ―法廷侮辱罪新設の議に接して―』（昭6・1）
萩原朔太郎『芥川龍之介の死』（昭2・9）　ほか

特集号

「労働問題社会主義批判」号（大8・7）
「資本主義征服」号（大9・2）
「議会改造」号（大9・8）
「宗教改革」号（大9・9）
「教育改造」号（大9・9）
「大震災」号（大12・10）
「普選特輯」号（大14・5）
別冊附録「第二貧乏物語」河上肇（昭5・1）
別冊附録「二・二六事件判決の全文」（昭11・8）
別冊附録「極東の危機（全訳）THE FAR-EASTERN CRISIS」スチムンソン（昭11・11）
別冊附録「裏切られたる革命 THE REVOLUTION BETRAYED」トロツキー（昭12・8）　ほか
附録「彦根屏風」（昭3・1）
附録「最新百科社会語辞典」水木錬次郎編（昭7・1）
附録「最新世界人名辞典」改造社調査部編（昭7・4）
附録「最新満洲辞典」（昭7・7）
附録「国際政治経済読本」馬込健之助（昭7・10）
附録「最新世界政治経済地図」（昭9・11）
附録「ファシズム辞典」宮沢俊義・木下半治監修（昭12・1）　ほか
「学生事件批判」号（大15・10）
「失業問題特輯」号（昭5・7）
「近衛内閣総批判」号（昭12・7）
「支那事変特輯」号（昭12・10）
「上海戦勝記念」号（昭12・11増刊）
「南方攻略特輯」号（昭13・11）　ほか

別冊附録表紙（一部）